令和２年度“オール近大”新型コロナウイルス感染症
対策支援プロジェクト研究報告書

企画題目	コロナＸSDGs：近大が提唱する未来社会の設計図
研究者所属・氏名	研究代表者：安田直史　社会連携推進センター 共同研究者： Andrew Atkins　国際学部 奥田　祥子　社会連携推進センター 熊本　理抄　人権問題研究所 高橋　朋子　グローバルエデュケーションセンター 新田　和宏　生物理工学部 藤田　香　総合社会学部 宮本　多幸　経営学部 安田　直史　社会連携推進センター 保本　正芳　総合社

１．研究、開発・改良、提案目的･内容

Covid-19 のパンデミックはその感染による健康被害や医療への負担などの直接的・医学的影響のみならず、自粛、ロックダウンなどにともなって間接的・社会経済的影響を及ぼしています。そして後者の影響の方が今後長く、かつ甚大な変化をもたらしそうな気配です。Covid-19 によって、プレコロナの社会が抱えていた問題点が浮き彫りにされています。つまり今後我々が Covid-19 と共存していくなかで、社会のあり方そのものについて考え、変革していく機会を得たともいえるでしょう。期せずしてかなり大きな社会変革が起こるわけですが、災害復興の理念 Build back better に学び、単に元どおりに戻すことを考えるのではなく、プレコロナより優れた社会に変革する絶好の機会であると前向きにとらえましょう。

今回の危機を 2025 年大阪万博､2030 年 SDG s とその先にある Soceity 5.0､日本の Sustainable Development につなげる機会にしなければなりません。まずは教職員から学生に呼びかけ、問題提起と専門的助言をしつつ、学生主導で数回のワークショップ、グループワークを通じて現在の社会を分析し、未来に向けた提言をまとめる。

２．研究、開発・改良、提案経過及び成果

経過
主要な活動は以下の三度のワークショップでの発表、意見交換と、その間の準備としてのグループワーク、個人ワークからなり、ワークショップおよび、その準備は学生中心で行い、教員が適時ガイダンス、アドバイスを行った。当初はできれば後半には対面のワークショップを行い、その様子を動画に撮影することにより、ヴィジュアルな成果物を作成することを想定していたが、Covid-19 の感染拡大にともない、以下のすべての活動をオンラインとすることを余儀なくされ、したがって動画作成も断念した。

ステップ１．意見を聞く　【オンラインセミナー　2020 年 7 月 18 日（土）】
参加教員からそれぞれの専門分野から見て Covid-19 の影響、あるいは考えるべき点について学生にインプットを行った。

ステップ２．意見を言う　【オンラインワークショップ①　2020 年　9 月 26 日（土）】
1) ステップ１以後に教員のガイドのもとでグループ議論を重ね、プレコロナ社会の問題点、ポストコロナ社会についての理想と課題について発表を行った。
2) 他の参加学生、教員からのコメント、助言を通して次のワークショップまでに考えるべき課題を整理した。

ステップ３．意見をまとめる　【オンラインワークショップ②　2020 年 11 月 14 日（土）】
ステップ２以後にプロジェクトメンバーで、今度は課題・問題解決策についての議論を重ね、その結果を発表。アドバイザーとして招待した外部の実務家から意見やアドバイスをもらった。

ステップ４．発表会.【”SDGs week in Kindai 2020”にて成果発表　2020 年 12 月 2 日（水）】

ステップ５．成果のまとめ.
各ステップおよび発表会でもらった意見やアドバイスを基に学生・教員有志が中心となってオンラインで成果を文書化して報告書を作成した。

成果
成果については添付の報告書を参照ください。

３．本研究と関連した今後の研究、開発・改良、提案計画

Covid-19 の状況は 2021 年 3 月時点でも非常に流動的で、収束の兆しは全く見えません。その社会的、経済的影響は今度さらに続き、問題は大きくなるでしょう。今が社会・経済の転換点に差し掛かっている可能性は大きいと考えられます。SDGs にとってもどう影響していくか不透明です。であるからこそ、今後も経時的に学生たちとの議論を通じて彼らに社会変革や持続可能性の問題、つまり SDGs について考えるように促していく努力を続けたい。その影響、変化を記録し、発信し続ける意義は大きいと考えます。

４．研究成果の発表等

発　表　機　関　名	種類（著書・雑誌・口頭）	発表年月日(予定を含む)

５．開発・改良、提案課題の成果発表等

SDGs ウィーク in Kindai にて発表した
提言・報告書冊子を作製した